

社会化概念再考

森 真 一

Reconsidering the Concept of Socialization

Shinichi MORI

要 約

社会化概念は、現在、かなり曖昧になっており、使用に耐えるものではなくなってきているのではないか。たとえば、経験的世界のどの事例が社会化の範囲に入り、どれが入らないかを指摘することは、現在の社会化概念の使用状況では困難である。

この難点を改善するため、本稿はA.シュッツの社会化概念の使用方法が当該概念の適切な使用法になっていることを検討する。シュッツのいう社会化とは「他者の先行所与性および相互主観性の形成・継続的確認」であり、社会化をその意味で使用すると、C.H.クーリーの「鏡に映った自己」やH.ブルーマーの「他者の役割取得」をも社会化の一局面を捉えた概念として捉えなおすことと、社会化が起きている状況とそうではない状況を明確に指摘することが可能となる。本稿は社会化の成立していない事例として、自閉症スペクトラムをとりあげ、シュッツの社会化概念の有効性を主張する。

キーワード：社会化、学習、他者の先行所与性、相互主観性、視線、自閉症スペクトラム

0 はじめに

社会科学において、あまり意味のない概念の使用例がいかに多いか、という事実について、シンボリック相互行為主義¹のH.ブルーマーは再三問題化する。「経験的世界のなかの具体例を取りあげ、これはその概念の実例であり、あれは実例ではないと間違いなく言明できるのが、概念の適切な意味であるが、キー概念の圧倒的多数が、そのようには経験的言及対象と結びつけられてはいないという驚くべき事実」(Blumer, 1969:33=1991:43)。「問題は、ある概念の範囲内に入るすべての事例を特定化しようとするときや、その概念の範囲には入らない事例をその概念の範囲内に入る事例から区別することがいつでもできるかどうか、という場合に生じてくる。いいかえれば、それができない概念は、正確な同定 (identification) も差異化 (differentiation) もできない」(ibid.173=227)。要するに、ある概念がどの具体例を指し、どの具体例は妥当しないのかが不明な場合が多すぎる、というのがブルーマーの主張である。そして、そのような概念のひとつとして彼は、社会化をあげる (ibid.33, 45n, 154, 173=43, 77, 201, 227)。

ブルーマーが問題化するような、社会化概念の使用状況は、現在も続いている。ブルーマーと問題意識を共有する本稿は、以下、社会化概念が、現在の社会学において、どのように使用されるに至っているのか、その状況を紹介する。それは、社会化概念の曖昧化、あるいは無効化とも捉えうる状況である。その状況を紹介したうえで、A.シュッツの社会化概念やブルーマーの他者の役割取得概念の使用の仕方を検討し、自閉症スペクトラムと呼ばれる人々の特徴を引き合いにだしながら、有効な社会化概念をシュッツらの議論をもとに提示したい。

以下の議論のために、慣例にしたがって、社会化の辞書的な定義を紹介しておこう。まず、宮島編 (2003) は以下のように定義する。

個人が他者との相互作用を通じて、自己を発達させ、その社会 (集団) に適合的な行動様式を獲得する過程。社会の観点からみれば、個人に社会 (集団) の価値・規範、技能・知識などを習得させ、個人をその社会 (集団) に適合的な存在にしていく過程であり、個人の観点からみれば、他者との相互作用を通して、その社会 (集団) にふさわしい行為を身につけていく過程である。社会全体だけでなく特定の社会集団についてもいうことができる。パーソンズの社会システム理論においては、システムが存続するための機能要件として、社会統制とともに特に家族における子どもの社会化が重視されたが、その後、社会化は成人期以降も続く継続的な過程であること、自己や自我の発達過程でもあることなどが強調されるようになり、言語的社会化、道徳的社会化、職業的社会化、政治的社会化など様々な次元で研究されるようになった。

アバークロンビーら (2000=2005) は、つぎのように社会化を定義している。

社会学者はこの用語を、人々が社会規範（social norm）への同調を習得する過程、すなわち社会の存続を可能にし、世代間の文化の伝達を可能にする過程を表すものとして用いる。この過程は、2通りの方式で概念化されてきた。すなわち、(1)社会化は社会規範の内面化と考える。つまり社会の規則が個人に内面化されるのであるが、これは、社会の規則が外的規制によって課せられるというよりも、自分自身によって課せられ、したがって個人自身のパーソナリティの一部になるという意味である。それゆえ、個人は同調したいという欲求をもつのである。(2)社会化は、社会的相互作用の必須の要素と考える。なぜなら、人々は自己の承認と位置づけを他者の目を通して得ることによって、自己イメージを強化しようとしていると考えられるからである。この場合、個人は、自らの行為を他者の期待に一致するように導くにつれて、社会化される。〈パーソンズ (T.parsons)〉の研究にみるように、上記2つの概念化は結び付いているといつてよい。

この紹介に続いて、アバークロンビーらは、社会化が3つの段階に区別できること（①幼児の社会化 ②学校での社会化 ③大人の社会化）や、過社会化（oversocialized）の問題、シンボリック相互行為主義の捉え方を紹介している。

辞書ではないが、社会学の概念を紹介するギデンズら（2014）は「社会の新メンバーが社会規範と価値の認識（awareness）を發展させ、自己について明確な感覚を獲得する社会的プロセス。社会化のプロセスは生涯を通じて続く」（Giddens & Sutton, 2014:132）と述べ、アバークロンビーら同様、社会化概念の起源として、T.パーソンズに代表される機能主義の伝統と、C.H.クーリーやG.H.ミードら相互行為主義に触れている。

以上のような社会化の辞書的定義に共通する項目を、あらためて確認しておく。

他者との相互行為を通じて達成されるもの、自己の発達、社会・集団に適合的な行動様式の獲得、社会の存続、文化の継承、価値・規範・知識・技能の習得、生涯にわたるプロセス。こういった要素が社会化概念を構成していることが確認される。

辞書的定義にも、素朴な疑問が頭に浮かぶ。たとえば、ある集団で適合的な行動様式が、べつの集団では不適合な行動様式になってしまうケースである。学校では議論好きでほめられる子どもが、家庭や近所ではうるさがられてしまうということもある。社会が多面的で、それぞれの世界の価値基準が矛盾することは珍しくない。この議論好きな子どもが社会化しているのかどうかは、それを判断する人の立場次第であろう。

辞書を離れて、社会学の文献に目を移すと、また違った様相がうかがえる。次節から、社会化概念がどのように使用されているかをいくつか紹介し、それぞれについて疑問点等を記しておく。

1 社会化概念の使用状況とその前提

つぎの事例1～3は、教育格差に関する教科書の文献である耳塚編（2014）からの引用である。引用元は、社会化と逸脱を論じる章（第5章）である。以下、当該の章における社会化の記述を、筆者のコメントを加えながら紹介する。事例4はZ.バウマンら（2001=2016）からのものであるが、同様の作業をおこなう。この作業のねらいは、現在の社会学において、社会化概念はどのように使用されているのか、その前提をいくつか確認するためである。これらの前提は、当該の章を執筆した社会学者だけではなく、現在の社会学者に広く共有され自明視された前提ではないか、と考えられるからである。

「社会化=学習」という前提

事例1

社会化は、人間だけでなく哺乳類や鳥類にもあり、適切に社会化されなかった哺乳類や鳥類は野生の生活ができなくなる。逆に、動物によって育てられた人間は、動物によって社会化されてしまうので、動物化してしまい、人間になれない（耳塚編、2014:108）。

この引用文は、人間以外の「哺乳類や鳥類」も社会化する、と唱える。おそらくこの言説は、「社会化=学習」と考えているのだろう。

人間以外の生物にとって、いつ、どこで、どのような場合に、どのように行動するか、それを指示するのが本能である。網を張るクモなら、だれに教わらなくても、適切なとき、適切な場所に、網を張る。しかし、哺乳類や鳥類の場合、本能のような生得的な行動指針や能力によって行動する部分が大いとはいえず、たとえば親鳥が子どもに飛翔の方法を示して教えたり、巣立ちすることを強要したりする場面をみれば、親から教えられたり、親を真似して学習したり、後天的に修得する行動パターンが、これらの生き物にもある。

そのような認識は正当であろうが、「学習」と「社会化」を同義に使用できるかのような社会化概念の使用方法には違和感がある。しかも、事例1の論理にしたがえば、“人間によって育てられた動物は、人間によって社会化されてしまうので、人間化してしまい、動物になれない”ということにもなる。

たしかに、人間に育てられた野生動物を野生の環境に戻すのには、かなりの苦労があるだろう。しかし、人間に育てられた野生動物、すなわち人間と社会化してしまった野生動物に「社会・集団に適合的な行動様式の獲得」は可能ではないだろう。また“ペットは家族の一員”と考える人がいる、というようなエピソードが家族社会学等で語られることがある。けれども、飼い主はペットに人間社会の規範・価値の内面化、社会の存続、文化の再生産をも期待しているのであるうか。

このように、「学習」はすべて「社会化」と考えると、なにが社会化の範疇に入り、なにがそれに入らないかが曖昧になってしまうのである。だが事例2の言説は、社会化概念の適用範囲をさらに拡大させる。

「社会化＝相補的關係」という前提

事例2

人々を社会化させるのは、必ずしも人というわけではない。人は自然からも多くのことを学習する。自然は人にとって、豊かな恵みを与えてくれる存在であると同時に厳しく恐ろしい存在でもある。不便で不衛生で不快で危険なのが自然であり、子どもたちはこうした自然から耐えること・克服しなくては生きていけないことなど、多くを学んだ。いまでは、こうした自然の社会化機能はほとんど喪失し、自然は美しいだけのものとなっている。自然がなくなっていくだけでなく、自然のもつ社会化機能もなくなっているのである（前掲書：114 傍点引用者）。

「社会化の担い手の変容」という見出しのセクションで、最初に登場する「社会化の担い手」が「自然」である。事例1で指摘したように、この言説は、「学習」ということばが使用できる場合は、いつでもそれを「社会化」ということばに置き換えることができる、という前提にたっている。人は自然からさまざまなことがらを「学習」する。それは自然が人間を「社会化」していることに等しい、というわけである²。

もうひとつ重要なのが、「社会化の担い手」という見出しからもうかがえるように、「社会化する側（＝社会化の担い手）／される側」という図式が前提されている点である。社会化とは、「親／子」や「教師／生徒」の場合のように、規範や価値基準、文化などを教え伝える側と、それらを学び身につける側、しつける主体としつけられる客体、すでに学習を完了している者とこれから学習していく者、といった相補的關係でおこなわれることがら、という前提である。この前提には、年長者から年少者へと知識や文化等が伝達される、ということも暗黙の前提になっている節がある。多くの社会学の教科書的文献は、「社会化の担い手（エージェント、agent）」に関するセクションを設け、子どもが大きくなるにつれて、家族、近隣社会、学校、仲間集団（peer group）などへと社会化の担い手が変化する、といった記述がなされる（たとえば、Conley, 2013）。

しかし、学習は相補的關係でだけ起きるとはかぎらない。いいかえると、「社会化の担い手」を特定するのが困難な場合がある。たとえば、競争のような対称的關係にも、学習の機会はある。ライバル関係にある者同士が相手から学ぶということは珍しくないだろう。その場合でも、相手から学ぶ一瞬においては、一時的に相補關係にある、と主張することも不可能ではない。けれども、社会化は相補的關係でなされるという前提によって、社会化概念の使用方法がクリアになる

とは思えない。

さらに、新しい道具、わけてもスマートフォン（以下、スマホと略す）やタブレット端末（以下、タブレット）等の電子通信機器が普及し、バージョンアップが早い周期でくり返されるような状況では、年少者の方がそういった道具の使い方に早く慣れやすい。その結果、年少者が年長者にそれらの道具の使い方を教えるという場面も増えてくる。これは社会化なのだろうか、年少者が「社会化の担い手」と捉えられるのだろうか。年少者が年長者に教えている、年長者は年少者から学んでいる、と表現すればすむのではないか。

たとえばある年長者がいて、現在の情報通信環境にその年長者本人は適応していないと思っていなかった、としよう。周りがスマホやタブレットでSNSをしているのをみても、そんなものを使う必要性も感じていなければ、それを使っていない自分は“時代に遅れている”とも感じていない。しかし、あるとき、年少者（たとえば孫）がスマホを使ってフェイスブック（以下、FB）に自分のページを設定してくれた。FBのそのページをみた知りあいから連絡があり、FBに近況を載せることがおもしろくなる。そして、外食時にはスマホで一つひとつの料理の写真を撮影し、せっせとFBに写真をアップするのを楽しむようになった。これは社会化なのだろうか。「学習＝社会化」と考えれば、社会化ということになる。しかし、ではこの年長者はスマホを使いこなす以前は社会化されていなかったのだろうか。電子通信機器を使えるようになることが現在を生きる人びとには必要だと考える人びとなら、「社会化されていなかった」と答えるだろう。だが、結局、なにが現代人にとって必要なスキルなのか明確ではなく、立場によって意見は異なるだろうし、技術開発によって「社会化されている」から「社会化されていない」へと容易に判断が変わることになる。これでは社会化概念を使う意味は感じられない。

事例2からは、こういった疑問が湧いてくる。

「社会化＝発達課題の達成過程」という前提

事例3

社会化は社会にとっては、社会成員の再生産であり、文化の継承・伝承という機能・意味をもつ。また、個人にとっては文化の内面化であり、役割取得過程であり、人格の形成であり、成長発達課題の達成過程であり、アイデンティティの確立過程である。したがって、社会化機能が不全に陥るということは……個人にとっては、役割取得不全・人格形成不全・成長発達課題未達成・アイデンティティ混乱ということであり、人格崩壊への路をたどることである（前掲書：109 傍点引用者）。

説明は不要かもしれないが、事例3の言説は、多くの教科書と同じく、社会化とは、規範や価値観の「内面化（または内在化）」であり、「役割」が遂行できるようになることであり、「人格」や「アイデンティティ」の形成・確立であり、それは年齢によって設定される「発達課題」

を「達成」していくことだ、と前提している。

社会化を「発達課題の達成」との関連で捉える傾向は、教育学・心理学の領域で明瞭である。「発達課題」といえば、アメリカの教育学者R.J.ハヴィーガーストが有名であるが、たとえば菊池ら（2010）の『社会化の心理学／ハンドブック』はハヴィーガーストのために、わざわざ1章を割いている。そのハヴィーガーストは発達課題を「個人の一生のそれぞれの時期で求められる課題であり、それに成功すれば、次の発達段階での幸福と課題の成功とがもたらされ、失敗した場合には、その個人は不幸になり、社会的な否認と次の発達段階での課題の難しさをもたらすような課題」（菊池ら、2010:48 傍点引用者）と定義している。

事例3の傍点部とハヴィーガーストの引用文の傍点部をみればわかるように、発達課題の達成に失敗すると「人格崩壊」や「不幸」になり、社会的に認められず、つぎの発達課題を達成することもむずかしくなる、という。

社会化とは、社会から設定された課題を順番に達成することであり、その失敗はたいへんな結果をもたらす、という前提が事例3とうえの発達課題の定義の両者には見受けられる。まるで、課題を達成できないと進級できないで「落ちこぼれ」てしまう、学校のように感じられる。ここには「社会＝学校」のメタファーが潜んでいる、ともいいかえられよう。学校であれば、教員によって生徒・学生が課題を達成したかどうかを判定する役割・責務を負う。けれども、一般社会において、ある人が課題を達成したかどうかについて、だれがそのような判定をおこなうのだろうか。そもそも課題はだれが設定するのだろうか。

「社会化＝本能の抑圧」という前提

事例4

わたしたちの自己が形成される過程、そしてまた本能（instincts）が抑圧されたり、されなかつたりする過程は、しばしば社会化と呼ばれる。わたしたちは、社会的圧力の内面化によって、社会化される——社会のなかで生存できる存在に変容する——のである。わたしたちは、容認される方法で行動する技能を身につけ、「自分の行為に責任を負うことができる」とみなされるとき、集団のなかで生活し行動するにふさわしい存在となる（Bauman and May,2001:24-25 = 2016:57-58）。

バウマンらの事例4は、社会化とは「自己が形成される過程」であり、それは「本能が抑圧されたり、されなかつたりする過程」である、というふうに社会化を説明する。これは、S.フロイトの人格理論を社会化の理論として活用したパーソンズの立場に近い。

パーソンズにかぎらず、通俗的には、フロイトの人格理論を以下のように解説することが多い。フロイトのエディプス・コンプレックスの概念に特徴的なように、フロイトは男の幼児の「発達」をモデルにして、幼児は母親をわがものとしたいという本能的・性的欲望をもち、その欲望の実

現を邪魔する父親への憎悪を抱き、父親への本能的・攻撃的の欲望をもつ。だが父親からの攻撃をも恐れるため、父親への敵意・憎悪を抑圧する。しかし母親への欲望は消えたわけではない。そこで、父親という攻撃者への敵意と服従の妥協の産物として、自発的に父親と同一化することで、空想のうえで母親の夫となる、すなわち母親をわがものとする事ができる。それは母親に対する性的欲望の、空想上の充足となる。さらにこのとき、社会の代表者としての父親と同一化することで、父親が身につけていた社会の規範・価値等を習得する。こうして、個人は文化を継承し、社会で容認される行動様式がとれるようになる。これが通俗的なフロイトの人格理論である。そしてバウマンらは、この通俗的なフロイトの人格理論の理解をもとに、事例4のような、「本能の抑圧=社会化」という見方を提示しているように見受けられる。事実、事例4の直前では「本能的なもの」と社会的なもの」という見出しで、フロイトの人格理論や、その理論にもとづく社会学者たち(N.チョドロウとN.エリアス)の主張を紹介している。

つまり、ここには「本能的なもの(とくに性的なものと攻撃的なもの)と社会的なもの」の二項対立が前提されているのである。「自然的なものと社会的なもの」の二項対立も暗黙のうちに前提されていそうである。そして、「本能的なもの・自然的なもの」を抑圧し、徐々に「社会的なもの」が優勢になっていくことが社会化だ、とみなす。

たしかに、動物のような赤ん坊が人間らしくなっていく過程をみていると、こういった前提も肯けそうである。だが、たとえば、暴力団のように、集団内では攻撃的なものが容認され、期待されさえもする場合はどうであろうか。借金の取り立てを仕事とする人たちも、相手につい情けをかけそうになる自分に働きかけて、威嚇的な感情を奮い立たせていることは、A.R.ホックシールドら感情社会学者が明らかにしてきた。このような社会的に期待された、攻撃的な感情労働をおこなう人びとは、社会化されていることになるのだろうか、されていないことになるのだろうか。

いや、そもそもそのような感情労働が可能になっているのは、エディプス的な本能を抑圧しているからであって、エディプス的な本能と暴力団員の攻撃的態度は同一視できない、とバウマンらは主張するかもしれない。つまり、本能的なものの抑圧によって第一次社会化を達成してあとの、第二次社会化にすぎない、という見解である。

そのような解釈も成りたつかもわからない。けれども、ブルーマーが表明した不満を解決するものではないだろう。

2 「よく社会化された」

以上、いくつかの文献から、現在、社会化概念はどのように使用されているか、その使用方法を可能にしている暗黙の前提とはなにか、を紹介・検討してきた。

つぎに、やや角度を変え、二つの社会化概念を比較検討していきたい。一つは、H.ベッカーに

よる社会化概念の使用例であり、もう一つはA.シュッツの使用例である。まず、ベッカーの例から紹介する。

ベッカーによる使用例1（B-1と略す。以下同様）

施設・機関（institution）はいつも自らの最良の部分を公に示す。それを運営する人々は、施設・機関の活動と評判に責任を負っているため、つねにちょっと嘘をつき、紆余曲折のあるものをなにごともないかのようにし、トラブルを隠し、問題の存在を否認する。……社会のなかでよく社会化された（well-socialized）一員（participant）は彼らのいったことを信じるかもしれないが、よく社会化された社会学者は最悪の事態が起きているのではないかと疑い、それを探し出そうとするだろう（Becker, 1998:91=2012:113 傍点引用者）。

B-2

学習は学校でなされると想定する根拠はない。たとえ、学習は学校でなされているという物語を学校自らが語っていても、またその物語を、この社会で十分に社会化された（well-socialized）メンバーが信じていても、あるいはバカと思われぬように信じているふりをしているとしても、である（ibid.:143=177 傍点引用者）。

B-3

あらゆるアート・ワールドは、そこへの参加者の協同を組織する。このために、そのアート・ワールドが存在する社会の、よく社会化された（well-socialized）すべてないしほぼすべてのメンバーが知っている規則を利用する（Becker, 2008:42=2016:49 傍点引用者）。

傍点部の「よく社会化された」「十分に社会化された」は、うえに示したように、well-socializedに当てられたことばである（以下、「十分に社会化された」に表記を統一する）。この「十分に社会化された」という表現は、とりわけ『アート・ワールド』（Becker, 2008=2016）では頻出する。

B-1は「サンプリング」を論じる章において登場する。一般に人々は、「信頼性のヒエラルキー」という基準を疑うことなく、権力や権威をもつ人の話を信じる傾向にある。社会学者は、逆に権力・権威をもつ人の語りを疑う必要がある。そういう文脈で、この「十分に社会化された」ということばをベッカーは使っている。

つまり、「社会のなかで十分に社会化された一員」とは、社会が常識として教えてきた価値基準を信じ込んでいる人々のことであり、「十分に社会化された社会学者」とは、常識的な価値基準を疑えという社会科学の価値基準を信じ込んでいる人々、を意味する。B-2、B-3についても、社会化概念の使い方は同様で、ある種の価値基準を疑わずに信じ込んでいる状態を意味する。

ベッカーのこのような使用方法は、これまで事例に挙げてきたものと同じ次元に位置づけられる。なんらかの社会・集団に適応し、その社会・集団で生きていくのに必要な価値基準や規範等を身につけている状態を指すものとして、社会化概念を使用しているからである。

一方、A.シュッツの文章にも「十分に社会化された」という表現が登場する。

シュッツによる使用例1 (S-1と略す。以下同様)

……第二の根本公理のこうした変様は、第一の根本公理に基礎を置いている。より厳密に言えば、この変様は、私の周囲世界にいる他の人びとについての私の経験を解釈することから生じてくるのである。だがこれらの変様は、十分に社会化された (voll-sozialisierten) 自然的態度のうちでは、プラグマティックに動機づけられた次のような基本的構成ないし理念化をとおして……ふたたび脇に置かれることになる (Schütz/Luckmann, 1975:73=2015:144 傍点、「社会化」は原著者、そのほかは引用者。S-2、S-3についても同様)。

S-2

私によって所与として受け入れられている生活世界は、あなたによってもまた所与として受け入れられており、だがそればかりでなく、われわれによっても、そして基本的にはあらゆる人によっても、所与として受け入れられているということ、このことは、十分に社会化された (voll-sozialisierten) 自然的態度にあっては自明視されているのである (ebd.74=145-146)。

S-3

……視界の相互性という基本命題に基礎づけられている自然的態度のこの自明性は、私の到達可能な範囲内の世界にいる他者を経験することにその起源をもっている一方、それ自体は、十分に社会化された (voll-sozialisierten) 自然的態度における疑問の余地のない所与の構成要素である…… (ebd.:81=158)。

うえのようにS-1、S-2、S-3の傍点部「十分に社会化された」は、「voll-sozialisierten」の邦訳である。ドイツ語のvollは「満ちている状態・完了した状態」を意味し、英訳でもfullyの語が当てられている³。

wellとfullyの違いはあるものの、この引用文だけを見ると、シュッツとベッカーとで、社会化概念の使用法に関して、特別な違いはないのではないかと考える向きもあるかもしれない。なぜなら、両方とも、なんらかの自明性に言及しているからである。ベッカーの場合は、ある価値基準を自明と疑わない態度を指し、シュッツの場合も、なんらかの存在に関する自明性を疑わない人びとの態度を指し示しているようである。

しかしながら、両者はまったく異なる状態を意味している。いうまでもなく、ベッカーが意味の次元を論じているのに対して、シュッツは、意味が成立する条件の次元を論じているからである。「シュッツのいう社会化」が成立して初めて「ベッカーが問題にする社会化」は成立する。

かつてシュッツは、パーソンズとの往復書簡で、「あなたの〔理論〕体系が重要で価値のあることを理解しましたし、同様にそれが私自身の書物の終わっているまさにそここのところから出発しているという事実をも理解しました」（Schütz/Parsons, 1977=2009:158）と述べているが、同じことがシュッツとベッカーとの間にも見いだされる。つまり、シュッツのいう社会化とは、そもそも意味がなぜ成立するのかという問いに関わる概念なのである。ベッカーの社会化概念は、シュッツの社会化概念の「終わっているまさにそここのところから出発している」というのが、本稿の主張である⁴。

シュッツの理論に慣れ親しんでいる読者にとって、以上の点は説明するまでもないことであろうが、次節では、確認の意味も込めて、赤ん坊や幼児を対象とする心理学的実験などを交えながら、社会化に関するシュッツの基本的な考え方を検討する。

3 社会化とは、他者の先行所与性および相互主観性の形成・継続的確認プロセス

結論からいうと、シュッツの社会化概念は、他者の先行所与性にもとづいて相互主観性が形成され継続的に確認されていくプロセス、を意味している。S-3を前後の文章を補足して再掲しておく。

S-4

私によって所与として受け入れられている生活世界は、私の共在者によっても所与として受け入れられているという想定こそが、自然的態度を特徴づけている。……また、視界の相互性という基本命題に基礎づけられている自然的態度のこの自明性は、私の到達可能な範囲内の世界にいる他者を経験することにその起源をもっている一方、それ自体は、十分に社会化された自然的態度における疑問の余地のない所与の構成要素である……。この自明性は、他者が私と到達可能な範囲内の世界を十分に共有する共在者となっている、そのわれわれ関係が続いていくなかで、継続的に確認されていく。……したがって一般的に言えば、生活世界の相互主観性一般が形成され継続的に確認されていくのはわれわれ関係においてである。生活世界は、私の私的な世界でも、あなたの私的な世界でも、それら二つを足した世界でもない。そうではなくて、生活世界はわれわれに共通する経験からなる世界である（ebd.:81=158-159 傍点原著者）。

この引用文の「社会化された」の部分で、「他者の存在を自明視したうえで、相互主観性が形

成され継続的に確証されている」と入れ換えても、意味は変わらない。

現在の社会化概念が意味するような、他者との相互行為を通じての価値基準や規範、行動様式の習得・内面化が生起するには、そもそも他者の存在が所与として自明視され、相互主観性の形成・継続的確証を通じて、さまざまな対象の実在が信じられていなければならない。

S - 5

社会化された自然的態度の根本公理は、第一に、知性をもった（意識を備えた）共在者たちが存在しているということ、そして第二に、そうした共在者たちは生活世界の諸対象を——私が経験するのと原則的に類似した仕方——経験することが可能であるということ、これである（ebd.73=143 傍点原著者）。

この、「社会化された自然的態度」は、S - 5にある2つの根本公理と、S - 4に登場する「視界の相互性」にもとづいている。

視界の相互性は、「立場の相互交換可能性の理念化」と「レリヴァンス体系の相応性の理念化」とから成立している、とシュッツはいう。

立場の相互交換可能性の理念化とは「もしも私が、彼がいまいるそこにいるとすれば、その時、私は彼と同一のパースペクティヴ、距離、到達可能な範囲のもとで諸事物を経験するだろう。また、私がいまいるここに彼がいるとすれば、彼は、私と同一のパースペクティヴのもとで諸事物を経験するだろう」（ebd.74=144）という想像・想定である。

レリヴァンス体系の相応性の理念化とは、以下のような事態を指す

S - 6

私と彼、つまりわれわれは、実際のないし潜在的にわれわれの到達可能な範囲にある客体とその性質を、あたかも同一の仕方を経験し解釈しているかのようにして行為し、意思疎通を行うことができるということ、これらのことを私と彼は当然の所与として受け入れることを学んでいる。そして……われわれは原則的に、これから後も引き続き、先に述べたような仕方ですべて進めていくことができるということ、したがってわれわれがすでに一緒に経験している世界が社会化されているばかりでなく、いまは私だけが経験することのできる世界もまた、原則的には社会化され得るということ、こうしたことについても、われわれは所与として受け入れることを学んでいる」（ebd.74=144-145 傍点原著者）。

つまり、レリヴァンス体系の相応性とは、私と他者とが、ある対象（=客体）の実在を疑わず、その対象について同じ仕方を経験・解釈し、それについてことばで意思疎通することができ、また今後も別の対象について同様のことが可能であると想像している事態を指している⁵。

以上のことを別の角度から捉えるため、赤ん坊を対象としたある心理学的実験を引き合いに

だしたい。『サイエンスZERO コミュニケーションの根源に迫る』（2013年8月4日放送 NHK・Eテレ）によると、生後6ヶ月ころの赤ん坊は、視力が0.1~0.2ほどしかないらしい。だから、赤ん坊の周囲の世界はかなりぼやけている。にもかかわらず、赤ん坊は近くにいる親などの他者の目に視線を集中させる傾向にある。ぼやけた世界のなかにあっても、人の眼球の動きは、白目の部分が多いこともあってか、赤ん坊に知覚されるらしい。

また、1歳2ヶ月の幼児をつかった実験では、最初、幼児と実験者が対面している。そのとき、実験者の背後からおもちゃのラッパをひらひら動かしてみせる。幼児は、実験者の背後にあるおもちゃに視線を向け、おもちゃを指さして、おもちゃの存在を実験者に知らせる。そして、実験者が幼児の指さす方向へ視線を向けると、幼児は自分の視線を、おもちゃから実験者の目へと移す。自分が視線を向けている対象（おもちゃのラッパ）に、他者（実験者）も視線を向けていることを確認しているのである⁶。

幼児のこの視線の動きからは、幼児の意識のなかで、「自分にみえているこのものは、おそらく目のまえにいるこの人にもみえているのだろう」と想像しているものと推測される。つまり、自分が知覚している対象と同一の対象を、他者も知覚しているだろうと想像していると推測されるのである。

この場合、幼児にとって、他者（母親や実験者）の存在は所与のものとして受け入れられている（他者の先行所与性）。この前提のうえに、さまざまな対象の実在性・所与性が相互主観的に形成される。このとき鍵となるのが、他者の視線に自分の視線を向けることである。視界の相互性（あるいは相互主観性）は、先行所与である他者の視線に自分の視線を向けることによって形成され確認されるものと考えられる。

このことは、言語の習得にも関わる。前出の『サイエンスZERO』では、つぎのように説明する。親は、幼児が視線を向けている対象（この場合、おもちゃ）について、たとえば「あれはラッパよ」と発話する。このような経験をくり返すことによって、幼児は対象の名前とことばを覚えていく、というわけである。

しかし、言語の習得は、他者があらかじめ実在するもの、所与のものとして存在することを、幼児が信じていなければならない。他者の実在を前提として、その他者の視線に自分の視線を向けることが、対象一般が客観的に実在しているとの想像の基礎となっている。この基礎がなければ、言語の習得には至らない。

その点についてシュッツはつぎのように述べている。

S - 7

この（視界の相互性の：引用者注）一般定立は……思惟対象を社会的に形成し言語的に固定化する際の基盤になっている。……ある歴史的状况のうちに生み込まれたいずれの個人にとっても、思惟対象はすでに言語のうちに見出される……。ただし、個々人は生活世界一般の言語的な形成、それゆえ社会的な形成を、自分の世界観の基礎として習得することができ

るというのは、視界の相互性の一般定立に基づいている。……この一般定立は、自然的態度をはじめから特徴づけている共在者の存在の疑いのない所与性を前提にしている。私によって所与として受け入れられている生活世界は、あなたによってもまた所与として受け入れられており、だがそればかりでなく、われわれによっても、そして基本的にはあらゆる人によっても、所与として受け入れられているということ、このことは、十分に社会化された自然的態度にあっては自明視されているのである（ebd.74=145-146 傍点原著者）。

このように、シュッツがいう社会化とは、他者の先行所与性（他者が最初から所与として現れていること）を受け入れ、他者の主観や意識、視点を想像することを通じて相互主観性が形成され継続的に確認されていくこと、を意味していると考えられる。

S-6でシュッツは、「われわれがすでに一緒に経験している世界が社会化されているばかりでなく、いまは私だけが経験することのできる世界もまた、原則的には社会化され得るということ、こうしたことについても、われわれは所与として受け入れることを学んでいる」と述べている。

「われわれがすでに一緒に経験している世界が社会化されている」とは、すでに私は他者の視点を想像し、その視点からは世界・対象がどのように経験されているかを想像しており、同時に他者もまた私の視点を想像し、その視点からは世界・対象がどのように経験されているかを想像しているという事態を意味している。そうだとすれば、これは相互主観性の形成を指している。また「いまは私だけが経験することのできる世界もまた、原則的には社会化され得るということ」は、いまは自分の主観でだけ経験されていることがらが、将来、可能性として、他者が私の視点を想像して、その視点からは対象がどのように経験されるかを想像することで、相互主観性が形成・確認されるだろう、という予想のことである。

S-7における「私によって所与として受け入れられている生活世界は、あなたによってもまた所与として受け入れられており、だがそればかりでなく、われわれによっても、そして基本的にはあらゆる人によっても、所与として受け入れられているということ、このことは、十分に社会化された自然的態度にあっては自明視されている」という言説についても同様である。ここでは、“現在ある個人の到達範囲内にはいない他者との間でも、おそらく相互主観性が成立するだろうと当の個人が自明視していること、それはすでに到達範囲内にいる他者との間で、十分に相互主観的な関係が成立し、その関係を自明視しているからだ”、という意味に解釈できる。

以上のように、シュッツは、先行所与として他者が現れていること、所与としての他者との関係を通じて相互主観性が形成され、継続的に確認されるプロセスを、社会化と呼んでいることが理解できるだろう。

4 相互主観性と他者の態度取得

シュッツのいう社会化が、他者の先行所与性と相互主観性の形成・継続的確認であることは、シンボリック相互行為主義でいう「他者の役割の取得」と同じ事態を示している。

ブルーマーは、G.H.ミードの思想の社会学的含意として、ミードにしたがえば、社会化の特質は、規範と価値の効果的な内在化というより、他者の役割を効率的に取得する能力にある(Blumer, 1969:76-77=1991:99)と主張する。

他者の役割取得は、たとえば「男」や「警察官」等の社会的な役割を、ごっこ遊びのような、他者との相互行為を通じて身につけていくことであるかのように説明する場合が多い。たしかに、そのようなケースも含まれるのかもしれないが、もっとも基本的には、他者の視点に想像によってたとうとすること、他者の意識内容を想像しようとするところこそが、他者の役割取得の意味である。

この点については、対象(object)の意味をシンボリック相互行為主義がどのように捉えるかに関わっている。ブルーマーはつぎのように対象の意味について説明する。

人間は、ひとつの世界のなかに、つまりもろもろの対象からなる環境のなかに生きている。そして人間の活動は、こうした諸対象をめぐって形成される。……対象の性質は、それに向き合う人間の志向や行為に依存して決まる。……ミードにとって、対象とは、指示されたり言及されたりするあらゆるものごとのことだった。……対象の意味は、対象に内在するものではなく、個人がその対象に対して、いかに行為する準備があるかということから生じるものである。そこに腰をおろすためのものとして椅子を使用する、という人間の側の準備状態の存在によって、それには椅子という意味が与えられる。椅子を使用した経験のない人間にとっては、その対象は、違った意味を、たとえば奇妙な武器といった意味をもって現れるであろう(ibid.68-69=87-88)。

われわれの社会に生まれ落ちた幼児にとって、椅子は椅子として存在していない。——椅子は椅子という意味をもちえていないのである。幼児や子どもは、椅子とはどういうものかを学ばなければならない。このことはどのようにしてなされるかということ、椅子に対してどのように行為すべきかということについて子どもに指示するような作用を及ぼす、他者の行為をとおしてなされる(Blumer, 2004:44)。

ブルーマーの主張を、前節の『サイエンスZERO』の内容を引き合いにだして説明しよう。

あの番組では、幼児は自分が視線を向けている対象(おもちゃのラッパ)に、他者(実験者)も視線を向けていることを確認していた。ここで幼児は、自分が知覚している対象と同一の対象

を、他者も知覚しているだろうと想像していると推測された。そして、このとき他者が、幼児が視線を向けている対象（この場合、おもちゃのラッパ）のことを、「ラッパ」と呼ぶ。こうして幼児は、いま自分の眼に映るこの対象が「ラッパ」と呼ばれることを知る。このようなプロセスで幼児はことばを覚えていくと番組では説明していた。

しかし、対象の名前（ことば）を覚えることと、その対象の意味を理解することとは同じではない。大人が「ラッパ」とか「イス」と呼ぶ対象を、その幼児がつねに適切に「ラッパ」「イス」と名指すことができたとしても、それで「ラッパ」「イス」の意味を理解したことにはならない。他者としての大人がラッパやイスに対して、どのような行為をしたり、どのような態度を示したりするかに視線を向け、その大人が対象に向かうときの意図や目的をその幼児が知ったと想像されるとき、そして同一の目的・意図をもって幼児が対象に向かうと大人に想像されるとき、その幼児は対象の意味を理解した、とその大人は判断する。

このとき重要なのは、大人（他者）の視点にたとうとしたり、他者の意識あるいは主観に接近しようとする幼児の想像力である。イスの意味を理解することは、ひとつの「学習」といえる。しかし、ブルーマーはそれを「社会化」とは呼ばないだろう。ブルーマーにとっては、あくまでも想像力を使って他者の主観に自分の身をおこうとすることが、他者の役割取得であり、社会化なのである。

くり返しになるが、人間が他者の視点や立場にたとうとすること、他者には世界がどのようにみえているか想像すること、それこそが他者の役割取得なのである。この意味での他者の役割取得は、それゆえ、シュッツのいう社会化、すなわち他者の存在を先行所与とした相互主観性の形成・継続的確認である。

自己という対象の意味を理解するのも、事態としては同様である。他者の役割取得というテーマでは、むしろこちらの方がよくみかけるだろう。

人間が自意識をもち、自己についてなにかの知識をもつのは、C.H.クーリーなら「鏡に映った自己」概念を使って説明するだろう。自分の身体的な容姿を知るには、鏡のような、自分を映し出す道具が必要となる。そして、容姿だけでなく、みえない自分の人柄や性格、能力については、他者が自分に対して示す反応や自分に関する評価のことばを通じて、その他者が自分についてどのような判断をしているか想像する。他者の主観、あるいは他者という「鏡」に映っている自分の姿を想像するのである。

きわめて多くの興味深い事例において、社会的準拠は、自分の自己が特定の他者のところ（mind）にどのように現れているのかに関して、かなりはっきり想像すること、という形式をとる。そして、自分もつ自己感情は、当の他者のところに帰属されたこのもの（他者のところに現れていると想像される自己：引用者）に対する態度によって決まる。この種の社会的自己は、反射された（reflected）自己または鏡に映った自己（looking-glass self）と

呼びうるだろう。……われわれは鏡に映った自分の顔、容姿、着ているドレスをみる。われわれはそれらに関心をもっている。なぜなら、それらは自分自身のものだからだ。そして、それらが自分の期待どおりになっているかどうかによって満足したりしなかったりする。それと同様に、想像のなかで、他者のところにおいて自分の外見、ふるまい、目的、おこない、性格、友人などなどが、どう思われているのかをわれわれは知覚する。そして、その影響をいろんな仕方でする。……われわれはつねに、他者のところで起きている判断を想像し、その想像のなかでその判断を共有する（Cooley,1998:164-165 傍点引用者）。

ミードの場合は、他者の役割取得によって、すなわち他者の眼差しをとおして、「私」は自己を知る、となる。他者の目に映っているであろうと想像される「私」の姿が、「私」の自己である。ここで他者の役割とは、「私」に視線を向けるという他者の役割、「私」という対象について他者が自らの意識のなかでなんらかの態度をとるという役割、なのである。この他者の役割を、想像のうえで自分が引き受けること、「他者はきっと「私」のことをこのようにみているにちがいない」というように、まるで他者の視点にたち、他者の立場が交換可能であるかのように、想像することなのである。このような想像を行為者が相互におこなっていることが、社会を成り立たせている。これは、相互主観性が形成され、継続的に確証されていることと同一の事態である。つまり、「社会化の特質は、規範と価値の効果的な内在化というより、他者の役割を効率的に取得する能力にある」というブルーマーの主張は、社会化とは相互主観性の形成・継続的確証というシュッツの主張と、同じであると考えられる。

シュッツは、他者についての「私」の経験には、「私は自分に対する彼の態度をも把握するという要素」が含まれる、として、つぎのように議論を進める。「その共在者もまた私の行為を、たんに客観的な解明関連のなかで経験しているだけではなく、私の意識生の表出として経験している。さらに私は、彼が私のことを、彼の行いを彼の主観性の表出として体験している人間として経験している、ということ把握している。……私は、共在者をとおして自分自身を経験し、またその共在者は私をとおして自分自身を経験する。他者経験——より精確に言えば、私についての他者の経験についての私の把握——のなかでの自己の鏡映化は、われわれ関係の構成的要素である。C.H.クーリーがすでに的確に示しているように、相互的な鏡映化は社会化の過程にとって基本的な重要性をもっている」（ebd.80=157 傍点原著者）。

「他者経験」がここでは「私についての他者の経験についての私の把握」と言い換えられているが、それは“他者の視点に想像のうえでたち、その視点からは「私」という対象はこのようにみえるのだろう、と想像すること”、すなわち、それがクーリーのいう「鏡に映った自己」、ミードのいう「他者の役割取得」に相当する。そして、自己がこのような想像をしていることを他者は知っており、他者がそのことを知っていることも自己は知っていることと想定していること、このことがつねに相互にプロセスとしておこなわれていること、それが「相互的な鏡映化」であ

り、シュッツのいう相互主観性の形成・継続的確認なのである⁷。

5 社会化、視線、自閉症スペクトラム

本稿の冒頭で、ブルーマーの嘆きを紹介した。「経験的世界のなかの具体例を取りあげ、これはその概念の実例であり、あれは実例ではないと間違いなく言明できるのが、概念の適切な意味であるが、キー概念の圧倒的多数が、そのようには経験的言及対象と結びつけられてはいないという驚くべき事実」。

だが、社会化概念をシュッツの使用法のように使えば、ある程度、ブルーマーの不満は解決される。事例1や事例2のように、動物や自然との関係で社会化概念を使用することは不適切であると判断できる。動物や自然とのあいだに人は相互主観性の形成・継続的確認は成立しないと考えられるからである。もちろん、なかには、動物や自然の主観・意識・視線を想像し、その想像によってはじめて対象（自己を含む）の存在を感じる、と主張する人はいるだろう。そのように主張する人をXとする。そして、Xと動植物とのあいだで相互主観性の形成・継続的確認が起きていることが事実だとしよう。しかし、もしかりにそれが事実だとしても、その事実が可能になる以前に、他者（人間である共在者）の所与性がそもそもXに信じられ、その他者とのあいだで相互主観性が形成され、継続的に確認されていなければならない、とシュッツなら答えるであろう。ゆえに、Xの主張は、Xは動物や自然から学習したと呼ぶべきで、社会化概念が適用可能な事実ではない。

逆に、社会化が起きていないケースを、シュッツの社会化概念の使用法から特定・同定できるだろうか。たとえば、自閉症スペクトラムというカテゴリーに類別される人びと（以下、自閉症者と略す）が、そのような存在として仮定される。

自閉症者は、①他者の所与性を受け入れているかどうかわかりにくく、それゆえ相互主観性の形成・継続的確認が他者とのあいだで明確ではなく、②けれども、学習という点では、問題がないどころか、かなり優秀であることもすくなくない。シュッツ的にいえば、自閉症者は学習するけれども、自然的態度にある人びととのあいだで社会化されていない存在、と考えられる。そして、特にここで注目したいのは、視線の問題である。

前出の『サイエンスZERO』では、アスペルガー症候群（自閉症スペクトラムの一種）の男性が登場する。彼は、人と目を合わせるのがひじょうに苦手であること、しかし相手の目を気にしなくてもよい電話でのやりとりも苦痛に感じていること、大学まで友人ができなかったこと、就職活動では筆記試験ではよい成績なのに、面接でいつも落とされていたこと、などを語る。彼はテレビなどで映像を観るときも、たとえばそこに人物が登場しているときでも、その人物の目をみようと思わず、あちこちに視点が不安定に移動することが、実験で明らかにされていた。一方、自閉症者と診断されない人びとは、映像の人物の目や、その人物の視線の先に、自分の視線を向

ける。

番組では、自閉症者は、小さいころから視力がよかったために、近くにいる他者の視線以外にもさまざまな対象がよくみえていたのではないか、そのために皮肉にも他者の視線を追うことや他者の目をみるのが習慣化されなかったのではないか、そのことが、他者と目を合わせることを避けることになっているのではないか、との仮説を提示していた。

他者の視線に自分の視線を向けることが、他者の先行所与性、相互主観性の形成・継続的確認、あるいは他者の役割取得の基礎となっている。なぜなら、他者の視線に自分の視線を向けることが、他者の存在の所与性を継続的に確認すること、その他者の目に何が映っているのかを想像すること、他者が知覚しているのと同じものを自分も知覚していると想像すること、その知覚の対象が実在していると想像すること、およびさまざまな対象が実在する世界が存在していると想像すること、同様のことをおそらく他者も想像していること、「私」は他者もまた「私」がおなじような想像をしていると想像していることを知っていると感じること（相互的な鏡映化）、につながっているからである。

このような他者の所与性と、それを基礎とした相互主観性の形成・継続的確認が成り立たない相手を、「十分に社会化された」自然的態度にある人びとは、「自閉症」と分類する。

自閉症に関するフィールドワークをおこなってきた村上（2008）は、自閉症者について、つぎのような特徴を指摘する。

自閉度の強い子どもの場合、目が合わない、あるいは呼ばれても触れられても相手の存在に気づかないことがある。……非常に自閉度の重い子どもを前にすると、視線は明らかにこちらに向いているのに目が合わない、こちらを見ていないと感ずることがある。彼は私の顔の形を知覚はしているが、私を人間としては捉えていない、私は自分が事物として扱われている、と感ずることになる。椅子のように私により登ってくることもある。……人間が存在することを知っていても、視線が重要な意味を持っていないのである。……この場合、他の人がいないだけでなく実は外的な対象としての事物も存在しない。……目が合うようにならない限り相手の存在には気づいているとは感ずられないし、当然他人に感情があることもわかっていない（村上、2008:1-16）。

また、自閉症者との関係において、これまでまるで透明人間のようにあつかわれていたのが、変化してくることがある。「……応答関係が生じるので、自閉症児と向きあう私たちもいままでとは異なる体験をすることになる。子どもが意図を持ってこちらに向かってきたり避けたりすることで、子どもは私のことを人として扱っていると感ずられるのである。このとき、今までは空想の世界に没頭しているかのように見えた子どもの目が覚めたように感ずられることがある」（前掲書、13）。

以上のような指摘をする村上は、自閉症者がどのような世界を経験しているかを、現象学的方法で再構成しようとする。しかし、本稿の目的は、自閉症者が経験している世界の解明ではない。ある種の人びとを「自閉症」と呼び、その人びとを「自閉症」と分類する側の人びとと、「自閉症」と呼ばれる人びととの関係が、本稿の関心事である⁸。

いうまでもないだろうが、“自閉症だから、こちらと目を合わせない”という理解は、順序が逆である。“こちらと目も合わさなければ、呼びかけてもこちらの存在に気づいていないように感じられる人、こちらのことを事物のようにあつかったり、透明人間のようにまるでこちらが存在しないかのようにふるまったりする人のことを、ある人びとが「自閉症」と呼んでいる”のである。

さきの引用文にもあったように、「目が合わない、あるいは呼ばれても触れられても相手の存在に気づかないことがある」「視線は明らかにこちらに向いているのに目が合わない、こちらを見ていないと感ずることがある」「私の顔の形を知覚はしているが、私を人間としては捉えていない、私は自分が事物として扱われている、と感ずる」「椅子のように私によじ登ってくることもある」「相手の存在には気づいているとは感ずられないし、当然他人に感情があることもわかっていない」。以上のような態度を示す人を目のまえにしたとき、自然的態度にある人びとは、とまどうことになるだろう。相手は「私」を透明人間か物体のようにあつかうからである。相手は「私」という他者が存在することを所与としていないように「私」には感ずられるからである。

相互主観性の形成・継続的確認ができない他者をまえにして、人びとの自然的態度の基礎が揺らぐ。不安になった人びとは、不安にさせた相手の「異常性」を唱え、また当の相手に非難のこぼれを浴びせる。

あるいは、そもそも自然的態度を揺るがせるきっかけとなったのが、目を合わせないというふるまいだったのだから、こちらに目を合わせるように仕向けようとする。その一例として、アスペルガー症候群との診断を受けた経営者のロビソン（2007=2009）による少年時代の回想を紹介したい。

「眼をみなさい！」／かん高い声で何度こういわれたことだろう。それは僕が小学校に入ったころから始まった。親から、親戚から、教師、校長、ありとあらゆる人たちから、このフレーズを聞かされた。……／時には先生方に、定規や、先ちょよにゴムのついた指し棒でびしゃりとやられることもあった。「先生が話しているときにはこっちをみなさい！」……／なぜ僕が眼をみて話を聞かないのか。そのわけは周知のことだと思われていた。みんなにとってその理由は簡単だった——あの子は悪い子だから。／「眼をみて話を聞かない人間はだれにも信用されないよ」／「犯罪者みたいだな」／「何かたくらんでるだろう。わかっているんだぞ」……／「きみみたいな人間の話を読んだことがあるよ。感情がないから表情もないんだって。歴史上の最もひどい殺人者の何人かはソシオパスなんだよ」／今では相手の眼

をみないで話すことは僕にとって当たり前になっている。アスペルガー症候群の僕たちは眼をみて話すのが、たんに心地悪いのだ。相手の目玉をじっとみるのがなぜ正常だと思われているのか、僕には全然理解できない。……／僕はロボットみたいに機械的な歩き方をした。動き方もぎこちなかった。顔の表情は硬く、ほほえむことはめったになかった。他の人からの呼びかけにまったく反応しないこともしょっちゅうだった。僕はまるでそこにだれもいないかのようにふるまっていた（Robison, 2007=2009:15-19）。

相手の目をみない人、相手の視線に自分の視線を向けない人、こういった人たちに対して多くの人びとが感じる怒り、違和、居心地の悪さなどが、アスペルガー症候群のロビソンという「鏡」に、映しだされている。また、呼びかけへの無反応、人がいても、まるでそこにだれもいないかのような態度を示すこと、を彼は報告している⁹。

一方で、「アスペルガー症候群の子どもたちの多くは標準をはるかに上回る語彙をもつので、「小さな学者シンドローム」と呼ばれることもある」（Robison, 2007=2009:19）ことを紹介している。ことばを覚えることは、学習の中核を占めているといっても過言ではないだろう。つまり、学習の能力、とくに学校での教科教育的な学習については、あまり問題がないのである。だから、「社会化=学習」との前提にたつ社会化概念であれば、アスペルガー症候群の人びとも社会化されていることになる。

しかし、アスペルガー症候群その他の「自閉症者」と分類される人びとと、そうでない人びとのあいだでは、他者の先行所与性および相互主観性の形成・継続的確認は困難である¹⁰。たとえば、先の引用文にあるように「僕はまるでそこにだれもいないかのようにふるまっていた」とすれば、おそらく彼にとって、すくなくとも少年時代のある時期・ある時点では、他者の先行所与性は成立していない、と推測される。それゆえ、彼の目のまえにいる自然的態度にある人は、彼によって自分が透明人間であるかのように感じさせられ、苛立ち、憎しみさえ向けることになる。それでも「社会化=学習」と考えれば、この場合も、社会化できていることになってしまう。このような社会化概念の使用法は、「自閉症」と分類するにいたった、自然的態度にある人びとの感覚、つまり診断名にもなっている“相手が自閉している”ような感覚とは、ずれているのではないだろうか。

けれども、シュツ的な使用法であれば、自然的態度にある人びととのあいだで他者の先行所与性および相互主観性の形成・継続的確認が成り立たない人びとを「自閉症」と呼んでいることが理解でき、そこには社会化は成立していないと明確に主張することもできる¹¹。

シュツの社会化概念の使用法にならうことによって、社会化概念は、本稿冒頭のブルーマーが嘆くような状況から脱する可能性があることを主張して、ひとまず本稿を終えたい¹²。

注 釈

- 1 symbolic interactionismは通例「シンボリック相互行為（作用）論」と日本語では呼ばれるが、たとえば「情報社会論」は情報社会についての議論であり、「現代家族論」は現代家族についての議論であるように、「～～論」とは「～～についての議論」を意味する。それに対して、symbolic interactionismは「シンボリック相互行為」についての議論でもあるが、「シンボリック相互行為」をもっとも重視するという立場の表明であり、またそれを前提とした科学論や方法論を採用している。それゆえ、「シンボリック相互行為論」よりも「シンボリック相互行為主義」の訳語の方が適切だと私は考えている。
- 2 ちなみに、この引用文は、「自然の社会化機能はほとんど喪失し」、人間が自然から「学習」しなくなったように主張するが、自然科学とは、実験・観察という方法を使って、自然から学ぼうとする営みであると考えれば、この言説の主張自体にも疑問を感じる。おそらく、子どもが野山を駆けまわって、そこで野生の果実を食べたり、ころんでケガしたり、という場面を想定し、そういう場面がなくなってきたといたいのだろう。
- 3 S-1、S-2については「fully social」である（Schütz/Luckmann, 1973:60-61）が、S-3については「fully socialized」（ibid.68）となっている。このことから、英訳者は、文脈によってはsozialisiertenとsocialはほぼ同義語と捉えていたことがうかがえる。
- 4 この往復書簡のやりとりが終結してから「三十五年後の回想」をパーソンズは書いている。そのなかで、パーソンズはつぎのようにいう。「私のみるところでは、内面化の問題を処理できないことが、目下論議中の論文や往復書簡のほとんどを含めて、シュッツの著作における顕著な傾向の一例であり、そのために不当に鋭いあれかこれかの二者択一を迫る結果になっています。……シュッツ博士は、行為者の見地と科学的観察者や分析者の見地とのあいだにまったく非現実的ともいえる鋭い対照を持ち出して、根本的に両者を相互に引き離してしまっているようにみえます。……人間行為の広い領域には不=合理的要素……のあることを、私は十分わきままえているつもりです。そこにはほかならぬ社会科学の中心問題のひとつがあると思いますし、またこの難しい問題をきれいさっぱり解決するまでには、なおかなりの時間が必要とされるでしょう。……決定的に重要と思われるこの問題では、私はアルフレッド・シュッツよりもマックス・ヴェーバーやジグムント・フロイトに近い立場にあります」（Schütz/Parsons, 1977=2009:186-188）。ここには「社会化」の語はみえないものの、パーソンズがフロイトの人格理論を前提にして社会化を考えていたこと、社会化を内面化の問題と考えていたことがうかがえよう。あわせて、パーソンズがシュッツの問題意識がほとんど理解できなかったこともうかがえる。
- 5 正確には、世界のどこに目をつけるかに関係する「主題的レリヴァンス」その他、レリヴァンス体系もいくつか分類されるが、ここでは紙幅の都合上割愛する。
- 6 シュッツ的にいえば、この実験に登場する赤ん坊は、すでに他者の先行所与性は成立しているものと考えられる。他者の存在は与えられたものとして疑わない段階にある、ということである。ちなみに、母親や実験者も赤ん坊とのあいだで相互主観性を形成し、継続的に確認している。「子どもの相手（たとえば母親）は、たえず子どもの側にもある程度の相互性が備わっていることを前提にしながらふるまっているのである」（Schütz/Luckmann, 1975:247=2015:480）。
- 7 視界の相互性の基礎をなす、“私をみるという他者の視線の想像”が、他者の役割の取得であり他者の態度の取得なのである。「取得」ということばは非常に誤解を招きやすいので、より適切な用語を考えるべきであろう。私は「他者の視線の想像」でよいのでは、と考えている。
- 8 村上のような、自閉症者の世界をなんとか理解しようとする試み、あるいは自閉症の治療という行為は、自閉症として分類された他者との社会化の試みといえよう。
- 9 視線が合わないことについては、他にも東田（2007）や青木（2012）にも記述がある。
別稿に譲るが、こちらに目を合わせようとしないう人が増えている感覚がある。学校や駅のホーム、電車内などにおいて、人が行き交うとき、チラリとも視線を向けないのである。以前からそういう人がいなかったわけではない。しかし、このような経験をする場面が増えているように感じる。自閉症者（あるいは自閉傾向の人）が増えているのかもしれないが、本稿の文脈では、視線を合わせようとしないう人の増加、あるいは視線を合わせる機会を避ける傾向（もちろん、両者とも仮説にすぎない）は、儀礼的

無関心とは異なる、現在の社会化のあり方と関連しているように思う。

- 10 もちろん、治療等を通じて、相互主観性の形成・継続的確認ができるようになる人もいる。軽度から重度、あるいは症状の現れ方も多様であるから「自閉症スペクトラム」と呼ばれるゆえんである。
- 11 ここには、社会化が成立しているかどうかを、だれが判断するのか、という問題がある。シュッツ的な社会化概念の使用法では、自然的態度にある行為者の視点にたつて、相互主観性が成立していないように感じられる場合、社会化が起きていない、と判断される。その典型が、「自閉症者」と分類される人びととともにいるときの経験である。シュッツやブルーマーからすれば、社会科学的観察者であっても、日常生活者の視点を理解し想像することに基礎をおいているはずである。いいかえれば、自然的態度にある日常生活者という他者の「役割取得」を社会学者も科学的研究・調査方法として採用するわけである。「ある個人や集合体の世界を構成する対象を特定化することは、その世界に親しんでいない研究者にとっては、簡単なことでも容易なことでもない。それは、第一に、自分自身を、その個人や集合体の立場におくという能力を要求する。他者の役割を取得するというこの能力は、その他のあらゆる潜在的な技能と同様に、有効に発揮されるために培われなくてはならないものである」(Blumer, 1969:51=1991:65)。「特定の個人や集団の社会的行為や、特定のタイプの社会的行為を研究しようとする調査研究者は、その行為を、それを形成していく者の立場からみなくてはならない」(ibid.56=71-72)。

もちろん、日常生活者は、「自閉症者」との関係を、「社会化」ということばで解釈・理解してはいない。しかし、相手が目を合わせないことや、相手に事物のようにあつかわれていると感じることへの違和感等は、相互主観性の形成・継続的確認が成立していないこと、すなわち社会化が起きていないことの根拠となるだろう。

もう一点、確認しておきたいのは、シュッツ的な社会化概念においては、社会化は個人的な能力の問題ではなく、他者との関係の問題である、ということである。それゆえ、「自閉症者」と自然的態度にある人との関係においては、自然的態度にある人は社会化されているが、「自閉症者」は社会化されていないということにはならない。両者の関係が社会化されていない、という事態なのである。

- 12 ただし、シュッツには、社会化概念を多義的に使っている部分もある。たとえば、現在の社会化概念の使用法に近い使い方をしている場合がある。「社会化の過程は、それが第一次社会化であれ第二次社会化であれ、「何が」に関する知識ばかりでなく、「どのように」に関する知識もまた社会的に配分されている」(Schütz /Luckmann, 1975=2015:612)という文脈では、「社会化=学習」に近い意味を表している。

また、G.ジンメルという「社会化」に近い用法もある。たとえば、「主観的な知識の社会化」(ebd.264=512)というときの「社会化」は、Vergesellschaftungの訳語であり、「客体化Objektivierungen」とほぼ同じ意味で使用されている。『生活世界の構造』第2巻の英訳(Schütz/Luckmann, 1989)にもsocializedの語が登場するが、ドイツ語原著(Schütz/Luckmann, 1984)では、vergesellschafteteとなっている。こちらの方は、「社会関係形成」(菅野、2003:30)や、「共同化」等と日本語では訳すべきであろう。同様の使用例は、シュッツ(1967:11=1983:58)などにもみられる。

参考・引用文献

(邦訳から引用する場合、原著に照らして、また文体や表記の統一のために、適宜引用文に変更を加えていることがある。)

Abercrombie, Nicholas, Stephen Hill and Bryan S.Turner, 2000, *The Penguin Dictionary of Sociology* (4th edition), Penguin Books=2005、丸山哲史監訳・編集『新版 新しい世紀の社会学中辞典』ミネルヴァ書房
青木省三、2012『ぼくらの中の発達障害』筑摩書房

Bauman,Zigmund and Tim May, 2001, *Thinking Sociologically* (2nd edition), Blackwell=2016、奥井智之
訳『社会学の考え方 第2版』筑摩書房

Becker,Howard, 1998, *Tricks of the Trade*, The University of Chicago Press=進藤雄三・宝月誠訳、2012『社

- 会学の技法』恒星社厚生閣
- , 2008, *Art Worlds*, University of California Press = 後藤将之訳『アート・ワールド』慶應義塾大学出版会
- Blumer, Herbert, 1969, *Symbolic Interactionism*, University of California Press = 1991、後藤将之訳『シンボリック相互作用論』勁草書房
- , 2004, *George Herbert Mead and Human Conduct*, Altamira Press
- Conley, Dalton, 2013, *You May Ask Yourself* (Core Third Edition), W.W.Norton & Company
- Cooley, Charles Horton, 1998, *On Self and Social Organization*, The University of Chicago Press
- Giddens, Anthony and Philip W. Sutton, 2014, *Essential Concepts in Sociology*, Polity
- 東田直樹、2007『自閉症の僕が跳びはねる理由』エスコアール出版部
- 菅野仁、2003『ジンメル・つながりの哲学』日本放送出版協会
- 菊池章夫・二宮克美・堀毛一也・斎藤耕二編、2010『社会化の心理学／ハンドブック』川島書店
- 耳塚寛明編、2014『教育格差の社会学』有斐閣
- 宮島喬編、2003『岩波小辞典 社会学』岩波書店
- 村上靖彦、2008『自閉症の現象学』勁草書房
- Robison, John Elder, 2007, *Look Me in the Eye*, Crown Publishers = 2009、テラー幸恵訳『眼を見なさい!』東京書籍
- Schutz, Alfred, 1967, *Collected Papers I*, edited by Maurice Natanson, Martinus Nijhoff = 1983、渡辺光・那須壽・西原和久訳『アルフレッド・シュッツ著作集 第1巻』、1985、『アルフレッド・シュッツ著作集 第2巻』マルジュ社
- Schütz, Alfred / Luckmann, Thomas, 1975, *Strukturen der Lebenswelt*, Luchterhand = 1973, R.M.Zaner and H.T.Engelhardt, Jr. trans. *The Structure of the Life-World*, Northwestern University Press = 2015、那須壽監訳『生活世界の構造』筑摩書房
- , 1983, *Die Strukturen der Lebenswelt Band 2*, Suhrkamp Verlag = 1989, R.M.Zaner and D.J.Parent trans. *The Structure of the Life-World vol.2*, Northwestern University Press
- Schütz, Alfred / Parsons, Talcot, 1977, *Zur Theorie sozialen Handelns*, Suhrkamp Verlag = 2009、佐藤嘉一訳『社会的行為の理論論争・A.シュッツ=T.パーソンズ往復書簡 [改訳版]』木鐸社